

補論 横山源之助の地方社会論と北陸地方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/10830

補論 横山源之助の地方社会論と北陸地方

第1節 横山源之助の生涯とその研究

横山源之助は富山県魚津の出身である。名著『日本の下層社会』の著者として横山の名前は有名であるが、彼のこうした北陸との結びつきについて、知る人はそう多くはないであろう。天涯茫茫とか夢蝶とか号したように、また生来の放浪癖の性格もあってか、まとまった自伝といったものを残していないし、故郷についてもあまり多くを語っていない。というより横山の人となりについては、今なお不明な部分があると言った方が正確であろう。しかし彼の仕事をすこし検討してみると、北陸地方の観察、分析の論文が少ない。その一部は後述するように『日本の下層社会』の中にも載せられている。

本論では横山の北陸地方に関する叙述の重要と思われる部分を整理しつつ、それを地方社会論というまとまりの中で把握し、横山についての評価のひとつの試論を提出してみたいと考える。横山の最大の功績が同時代の都市の下層社会の実態を克明に記録しているところにあり、『日本の下層社会』がその集大成であることは周知のとおりである。横山の活動の本拠地が東京であったことから、対象となる下層社会が東京という大都市にひとつはおかれていた。これは本論の結論ともかかわるが、しかし横山の観察眼は諸都市・地方の下層社会にもおよんでいたのである。東京・大阪などの大都市の下層社会と地方のそれとは性格が異なっていたことをとりあえずここでは指摘するにとどめよう。この地方の下層社会、もっと広く把握するならば横山の地方社会論の下敷はその主要部分は北陸地方での経験、蓄積にもとずいていた。したがってこの点も以下の論究で明らかにしたいと考える。

従来の日本近代史研究の中で、横山源之助の仕事に対して次の4つの視角からの評価がなされてきた。その第1は『日本の下層社会』の解説をつうじての、コメントである。中央労働学園版の土屋喬雄の解説、岩波文庫版の風

早八十二の解説などがそれにあたる。これらは『日本の下層社会』の解説のために、その内容の紹介、意義づけ、横山の仕事全体の中での位置づけなどに主眼がおかれている。解説の枠内にとどまり、横山の本格的な分析を意図した研究とは少しことなった性格のものといえよう。その点で西田長寿、隅谷三喜男の研究は同類ながら一步踏み込んだ分析となっている。西田は横山の経歴・活動をこまかく分析したうえで、『日本の下層社会』の成立の契機をとりあげ、さらにその後の仕事との関連についてもふれている。また西田の作成した「著作、論文目録」はその後の研究の貴重な出発点となった⁽¹⁾。隅谷は『横山源之助全集』第1巻の解説中で、独自の横山論を提出している⁽²⁾。それはたんに『日本の下層社会』の内容だけに限定せず、それに収録されなかった前後の都市下層社会関係論文にも視野を拡げて、横山の「視座」を確定せんとしている。次の要約にその点は明確になっている。横山は「下層社会の発展の序列として、都市の窮民としての雑業層を社会の最下層におき、近代的機械工業における賃労働者である紡績職工と鉄工とを先端におき、その中間に職人と手工業労働者をおき、さらにこれら都市貧民とならべて農村におけるその対応者として小作人をとりあげ、これらを総括して、『下層社会』と呼んだのである」⁽³⁾。隅谷のこのような把握を再検討することも、本論の課題のひとつである。

第2の視角は横山源之助の文学者との交流に焦点をあてる。青雲の志を抱いて上京した横山が最初に啓発をうけたのは二葉亭四迷である⁽⁴⁾。その二葉亭の下層社会観察に影響をうけて松原岩五郎『最暗黒の東京』が生まれ、横山の一連の仕事が成ったわけである⁽⁵⁾。そのほか内田魯庵、木下尚江等とも接触があったが、「いずれも日本近代文学史のうちで異例の強い社会的関心・自覚にひとたび身を灼いたことのある文学者」⁽⁶⁾であることに意義を見出している。

第3は初期社会主義・労働運動への接近の問題である。平野義太郎「労働運動の序幕」⁽⁷⁾がこの面での先駆的な業績で、この論文の副題には「横山源之助・片山潜を通じて見たる」と付けられている。平野の論文タイトルが横山の論文「労働運動の初幕」(『中央公論』第12年8号、1899年8月)を意識したものであることはほぼまちがいない。その論文で横山は日清戦後の労働運動

の出発と興隆を歓迎し、「労働運動は、我日本の舞台に在りては初幕のみ」として欧米の如き発展を期待している。そして片山潜に接近し、『労働世界』に度々寄稿するところとなった。この横山の動向を平野は注目するが、結局「かれは依然として記者にほかならず、それ以上の労働運動者たりえなかったのであるから、片山の進んだ艱難の路には遂に進み得なかつた」⁽⁸⁾と評価する。筆者は平野とほぼ同意見で別の論文で次のように述べたことがある。「横山源之助は『日本の下層社会』(1899年刊)を世に問うて労働運動に急接近した人物である。『内地雑居後の日本』が『労働世界』の社会叢書第1巻として刊行された際には片山潜と交流し、労働運動の開幕を高く評価した。その結論の『労働問題最終の目的』の部分では『社会主義は実に二十世紀の大勢力なり』、『職工諸君は此の主義によりて立』つべしと呼びかけてはいるが、その内容について自説は述べていない。刊行直後に過労で魚津に帰郷したこともあって、横山は無産のルポルタージュに秀でた『写真報告の優れた記者』にとどまり、『大衆的組織者=宣伝者たる片山潜』(平野義太郎『労働運動の序幕』)および初期社会主義とは決別してしまった」⁽⁹⁾。

第4は日本資本主義確立過程における都市問題研究の中で横山源之助の諸論文を評価するものである。『日本の下層社会』に即していえば、第1編の東京の貧民状態などを中心とした記述が史料としての意味をも含めて、都市形成史の分析に大いに役立っている。後述するように、後年にも東京等の諸都市形成・発展のレポートを残しているが、それらも含めて貴重なものである。また第4編の機械工場の労働者などを中心とした記録が、資本制生産の展開のもとでの労働者の状態を具体的に知るうえで、数多くの材料を提供している。これらは資本主義社会における都市のあり方、また都市における諸民衆運動の歴史的前提の究明というきわめて現代的な課題とも鋭く結びついているといえよう。したがってこの視角から研究を志すものは、一度は『日本の下層社会』をとりあげ、さらには横山の他の著作・論文に目を通さざるをえない。筆者もすでに横山の論文等を引用したことがあるが⁽¹⁰⁾、こうした研究の多くは横山の仕事を部分的に引用するという形式をとり、その仕事全体の評価とはややことなつたものといえよう。1例だけをとりあげると『日本の下層社会』と並んでよく引用される論文に「東京の工場及工場生活のパノラ

マ』（『新公論』25年9号、1910年9月）がある。日露戦後の都市と資本制的工場生産の発展を証明する史料として引き合いに出されるが、この時点の横山の観察力を後述する毎日新聞時代の『日本の下層社会』のそれと同水準と見てよいかどうか検討を要する。前掲西田論文中の目録を見れば気付くことであるが、1900年代後半には前出論文以外に大都市に関する論文はほとんどない。興味、関心もはっきりと他に移ってしまっている。このようなことから横山の仕事全体を把握し、それぞれを部分的に利用するのではなく、整理してみる必要性が生じる。とりもなおさずそのことは、『日本の下層社会』の再評価ともつながると考えるし、また確立期日本資本主義の社会・労働問題をみた横山の洞察力の鋭さをより明確にすると考える。その意味では『横山源之助全集』（明治文献）は時宜にかなった企画であったが、第1巻（1974年）、第3巻（1972年）のみで中断されたのは誠に残念である。

横山源之助の研究史の最後に、立花雄一『評伝横山源之助』（創樹社、1979年4月）をとりあげる。これははじめて本格的に横山の伝記をまとめただけでなく、従来個別的に評価されてきた横山の仕事を体系的に整理した点でも有意義な研究である。西田前掲論文の水準を4半世紀後に乗りこえたといえる。章別の構成は次の通りである。第1章米騒動の浜辺で一生き立ち、第2章二葉亭四迷の門へー青春・放浪時代、第3章下層社会ルポ作家としての出発、第4章開幕期労働運動と横山源之助、第5章過労にたおれる一帰郷、第6章労働運動への復帰ー右派労働運動の旗争とその潰滅、第7章後半生の横山源之助、第8章後期作品管見ー『日本の下層社会』以後。第2～4章が前述した3つの視角の部分にそれぞれ該当している。この点に関しては新しい観点はないように思われるが、第5章以下とくに第6章の部分は従来ほとんど明らかにされていなかった。西田前掲論文および目録は横山の労働運動、『労働世界』との関係を充分には考察していないが、それを克服している。立花は横山の全生涯をていねいに跡付け、現在まで知りうる横山の全論文の紹介という点では特筆されるべき作業をおこなった。しかし一方ではそれらはどうしても網羅的なものとなり、各章の切り込みもそれぞれ浅い感じはまぬがれない。

本節ではもうひとつ、以下の検討にかかわる限りで横山源之助の生涯を述

べておこう。横山は1871（明治4）年2月、富山県魚津に生まれている。父親は魚津のある網元で、実母はその家の下女であったという事情から、生れおちるとすぐに横山家の養子となった⁽¹¹⁾。養父横山伝兵衛は腕のよい左官職人であった。源之助は子供の頃から才智に秀れており、一時醬油醸造業沢田六郎兵衛の徒弟に出されたこともあったが、「富山尋常中学校創立されしとき、君を一商店の徒弟として置くよりは、中学校に入れて学問させた方が善いと勧むる人があったので、養父母も漸く承諾し、愈々入学せしむることになった」⁽¹²⁾。しかし、翌2月、何人かの学友と一緒に青年らしい志をもって東京に飛び出してしまった。英吉利法律学校（後、東京法学院、現在の中央大学）に学んで弁護士を目指し、養父母も支援して学資に事欠かなかったという。不幸な星の下に生まれたが、横山家のあたたかい援助にめぐまれていたといえよう。しかし度々弁護士試験に落ち、学資の援助もとだえ下宿を転々とする放浪時代を迎えた。そうした中で二葉亭四迷の影響をうけて社会問題に関心を抱き、また川島浪速や『国民の友』の平和主義にも近づいた。さらに先輩松原岩五郎に従って実情調査の道に入っていったのである。

1894（明治27）年の後半、片淵琢の世話で島田三郎の毎日新聞社に入社し、横山の活動が陽の目を見ることになった。後出の「戦争と地方労役者」はその最初の仕事にあたる。それから1898（明治31）年までの間、下層社会等のルポルタージュを次々と発表するところとなった。

横山の毎日新聞社での仕事は、第1に東京を中心とした都市の下層社会の探訪にあった。その間文学にも関心をもち続け、露伴や逍遙などを訪れたりしており、仕事の中にも文学的な臭いを強くもたせている。第2の仕事は1896（明治29）年3月から4月にかけて、桐生・足利方面の絹織物業界に関しての視察報告である。第3は、その後同年8月頃健康を害して魚津に帰ったが、9月から翌年7月に大阪へ行くまでの約10ヶ月間、富山を中心に石川・福井の北陸3県の地方都市下層社会、農村・小作人情、機業などの報告を相ついで発表している。第4は1897（明治30）年7月から10月にかけて、大阪を中心とした阪神地方の労働事情を調査している。その年の10月に帰京し、それまでの記事を中心とした『日本の下層社会』の編集・出版におわれるのである。

これと同時期にもうひとつ忘れてならないのは労働運動との結びつきである。日清戦後の労働運動の出発は労働組合期成会の結成が象徴的な出来事であるが、この時点では横山はまだ大阪に居り、上述の帰京後に交流がはじまったと思われる⁽¹³⁾。そして労働組合期成会の機関誌『労働世界』の常連となり、高野房太郎・片山等をバックアップした。そして『日本の下層社会』に続いて『内地雑居後の日本』を書き上げることになったのである。この時の「横山源之助は労働運動の代弁者であり、彼のこころはたかまるばかりの労働運動の躍動とこのように一体であった」⁽¹⁴⁾という評価はオーバーなものではない。おそらく横山の思想の最高潮期であったといってよい。

ところで突如横山は帰郷する。1899（明治32）年8月のことで、過労に倒れたからである。その原因のひとつに毎日新聞社を辞めるといふ経緯もあったと思われるが、その理由ははっきりとはしていない。約1年半ほど魚津に滞在するが、この間後述するように北陸に関係するいくつかの論文を発表している。また後の横山の思想的展開の若干の契機が滞在中に醸成されたようにも思われる。しかし『労働世界』との交流はまだ続いていた。

横山は一時郷里に永住することを考えたようだが、1900（明治33）年5月頃上京を決意する⁽¹⁵⁾。高野・桑田熊蔵らの援助によって農商務省の職工事情調査に参加することになり、『職工事情』の報告の一部を担当した。そして労働運動へも復帰するが、片山潜らとは別れ、大日本労働協会の大井憲太郎と手を結ぶことになる。この辺の事情は立花前掲書によってはじめて明らかにされたが、いまだ充分なる説得力は有していない。ただこの頃より実業界・実業人レポートといったような読み物的なものが次第に増加していく。1912（明治45）年3月からはブラジル移民に加わり、その通信を「大阪朝日新聞」に送っている。南米・移民問題に傾倒し、やがて晩年を迎える。晩年の横山は悲惨な生活を送ったようである。家族関係も不幸であり、彼の性質である放浪癖も禍いした。そして1915（大正4）年6月、東京小石川において、44歳の若さでさびしくその生涯をとじた。

横山源之助の略歴は以上であるが、こうしてみると毎日新聞社時代が彼にとってもっとも油ののり切った時代であった。その時期の活動の結晶として『日本の下層社会』と『内地雑居後の日本』があるわけで、それらがきわだ

った光を放っているのも、もっともなことである。この毎日新聞社時代の後半と1900年前後の2度にわたって北陸に滞在しているが、この地で視察し報告した仕事の整理を、より緻密にしてみることの意義は深いといえよう。

第2節 地方社会・北陸関係論文の概要

以下の各節において、横山源之助の地方社会に関する論文、とりわけその基礎となった北陸地方に関する論文の検討を行うが、まずその論文目録を整理し、それぞれの概要を見ることにしよう。

次にその論文目録と概要を掲げるが、若干のコメントを先に述べる。この目録は西田前掲論文中の目録をもとに立花前掲書中より補足し、さらに筆者が独自に発見した論文を、いくつか追加して作成した。地方社会を広い意味で把握し、東京・大阪などの大都市に限定した論文を除いたものを対象とした。なお北陸・石川県関係のものは表中に指示してある。先行の目録は筆名が必ずしも明確ではないので、あえて表示した。16～18の「地方の下層社会」⁽¹⁶⁾はひとつのまとまった重要な論文であるが、3つの内容に分けて考えた方が理解しやすいので区分けした。1894(明治27)年以降1912(明治45)年迄の20年弱の間に、80本を超える論文を横山は発表していることになる。もちろん各論文の分量はバラバラで、400字程度の短文から400字詰原稿用紙で80枚以上といったものまでである。

80以上の論文であるためやや立ち入って検討するとその内容は多岐にわたるが、以下の考察の課題に照らして次の①～⑫のテーマにそれらを整理してみることにする。若干の論文が重複するが、各テーマに属する論文を表中の頭書番号で示しておく。なお必要のある限り北陸関係論文はその番号に()を、石川県関係のものには[]を付す。

①は地方の下層社会とその民衆の実態報告で、(16), (23), (24), (39), 47, (50), 59, 62である。②は農民の生活事情に関するもので、(13), (22), 26, (36), 41, (44), (46), (52), 55, (58), ③は小作人事情を②から独立させたもので、3, (17), 38, 39, 40である。④は漁民の生活事情に関するもので、(13), (24), (50), 59, 72, 74, (75)である。⑤は地方の町民の生活事情に関するもので2, (13), (21),

横山源之助の地方社会に関する論文目録と概要

論 文 名	掲載誌・号刊行年	筆 名	概 要
1. 戦争と地方労役者	毎日新聞・7212号 ～1894年12月～ (6)	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。日清戦争時、東京における地方出身労働者の賃金、思想等の変化を述べているが、当時の地方社会を類推しうる。
2. 都会と田舎	毎日新聞・7409号 ・1895年8月	天涯茫茫生	都会と地方における議員選挙、商人、労働者等の違いを一般的に述べている。
3. 社会最も憐むべき者	毎日新聞・7553号 ・1896年2月	天涯茫茫生	日清戦争による青森県の2遺族の悲惨な生活の実例の報告。
4. 出門第一日	毎日新聞・7579号 ・1896年3月	天涯茫茫生	『日本の下層社会』所収。宇都宮までの旅行記であるが、車夫の比較論がある。
5. 宇都宮を一瞥せる儘	毎日新聞・7580号 ・1896年3月	天涯茫茫生	前項に続く旅行記で、職人の賃金等を記述。
6. 足利を一瞥せる儘	毎日新聞・7581号 ・1896年3月	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。機業地の新聞店・飲食店の雑感。
7. 野州足利の機業	毎日新聞・7589号 ～1896年4月(3)	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。足利機業の輸出挫折の3原因論。
8. 一面より観たる足利	毎日新聞・7596号 ～1896年4月(3)	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。機業地における進歩と文明、宗教・教育、風俗等を論述。
9. 文明を誇むを喜ばざる者	毎日新聞・7612号 ・1896年4月	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。鉄道の発達のなかで地方人力車夫等の環境の変化を指摘。
10. 地方の木賃宿	毎日新聞・7613号 ・1896年4月	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。東京と地方の木賃宿を泊数・客層・飲食・支払方法で比較。

論文名	掲載誌・号刊行年	筆名	概要
11. 機業地の側面	毎日新聞・7617号 ～1896年5月～ (13)	天涯茫茫生	『日本の下層社会』の第3編1章桐生足利地方の織物工場、に整理されて所収。
12. 新町の綿糸紡績所	毎日新聞・7645号 ～1896年6月(6)	天涯茫茫生	桐生足利地方の調査後の三井の紡績工場報告。
13. 田舎の風尚	毎日新聞・7729号 ・1896年9月	天涯茫茫生	(北)『日本の下層社会』所収。魚津の一般町民、村民、漁民の生活観察。
14. 地方の青年	毎日新聞・7734, 37号・1896年9月	天涯茫茫生	(北)『全集』1巻所収。魚津の青年の社会的関心を記している。
15. 所謂有志なる者	毎日新聞・7735号 ・1896年9月	天涯茫茫生	(北)富山からの報告で、地方の名士の人物論。
16. 地方の下層社会	毎日新聞・7764号 ～1896年10月(1) ～(6)	天涯茫茫生	(北)『全集』1巻所収。北陸地方の下層民の実態報告。
17. 同上	毎日新聞・7771号 ～1896年11月(7) ～(17)	天涯茫茫生	(北)『日本の下層社会』第5編第1～8の小作人生活事情の項に該当。
18. 同上	毎日新聞・7796号 ・1896年12月 (18)	天涯茫茫生	(北)『全集』1巻所収。地方の親方・徒弟制を東京と比較しつつ述べている。
19. 農業国の工業(富山県工業品評会を見る)	毎日新聞・7782号 ・1896年11月	茫茫	(北)品評会の観察記で、地方工業品の問題点を指摘している。
20. 地方の下女拂底	毎日新聞・7803号 ・1896年12月	天涯茫茫生	(北)『日本の下層社会』所収。工業化による下女の減少と地位の向上を指摘。
21. 田舎のとしのくれ	毎日新聞・7816号 ・1896年12月	無腸生	(北)魚津でみた年末の生活と婚礼負担について。

論 文 名	掲載誌・号刊行年	筆 名	概 要
22. 田舎の正月	毎日新聞・7826号 ～1897年1月(3)	無腸生	(北)『全集』1巻所収。 村落の正月の様子を紹介。
23. 炉辺閑話	毎日新聞・7836号 ・1897年1月	無腸生	(北)地方の子供の遊び、 書店の様子、貧民の救済に ついて述べている。
24. 世人の注意を逸す る社会の事実	国民之友・340号 ～1897年3月～ (4)	横山源之助	(北)北陸地方において米 価騰貴が下層民にあたえる 影響について述べ、その多 くが漁民であることから彼 らの生活状態にも言及。
25. 蕉鹿	国民新聞・2159, 62号・1897年4月	天涯茫茫生	(北)地方小資本家の蓄財 論と地方の職人論。
26. 田舎の芝居	国民新聞・2160号 ・1897年4月	漂天癡童	芝居見物にあらわれた地方 の実情の観察とその批評。
27. 地方職人の現状	国民之友・343号 ・1897年4月	横山源之助	『全集』1巻所収。都会の 職人との相違を親方との関 係から述べている。
28. 金沢瞥見記	毎日新聞・7961号 ・1897年6月	天涯茫茫生	(石)金沢は北陸の大都会 であるが実業的生産にとぼ しく、労働者等の生活状態 も悪条件であると指摘。
29. 北陸の慈善家	毎日新聞・7963号 ～1897年6月(2)	天涯茫茫生	(石)『日本の下層社会』 所収。金沢の慈善家小野太 三郎の紹介。
30. 加賀の工業	毎日新聞・7967号 ・1897年6月	天涯茫茫生	(石)『全集』1巻所収。 加賀地方の織物、箔工業等 について略述。
31. 九谷焼	毎日新聞・7987号 ・1897年7月	天涯茫茫生	(石)『全集』1巻所収。 九谷焼の産出額、職工等の 紹介。

論文名	掲載誌・号刊行年	筆名	概要
32. 福井地方の機業	毎日新聞・7988号 ・1897年7月	天涯茫茫生	(北)『日本の下層社会』第3編第1章末に、とくに表記がないが所収。
33. 福井地方の工女	毎日新聞・7989号 ・1897年7月	天涯茫茫生	(北)『日本の下層社会』中、32に続く工女の実態。
34. 秋田県特志の富豪	毎日新聞・8104号 ・1897年12月	無署名	秋田県地主荘司家の小作人優遇策の紹介。
35. 正月楽しき乎	毎日新聞・8125号 ・1898年1月	天涯茫茫生	『日本の下層社会』所収。各地の紡績工女の正月。
36. 嫁入準備と下女	家庭雑誌・115号 ・1898年4月	天涯茫茫生	(北)北陸農村と東京の下女の嫁入り支度の比較。
37. 福井地方に行なはるる工女の俚謡	労働世界・11号・ 1898年5月	無署名	(北)福井、足利の工女の俗謡の簡単な紹介。
38. 米価の騰貴と小作人	労働世界・11号・ 1898年5月	天涯茫茫生	『全集』1巻所収。贅沢に奢れる地主の批判。
39. 地方貧民情況一斑	労働世界・12号・ 1898年5月	無署名	(北)魚津町の貧民と小作人の生活の現状の紹介で、米騒動にも若干言及。
40. 本邦現時の小作制度に就て	天地人・6, 7号 ・1898年6, 7月	横山源之助	『日本の下層社会』所収。各地小作制度の比較検討。
41. 農家風俗	太陽・5巻4号・ 1899年2月	天涯茫茫生	若連中、祭礼等と町の生活の相違を言及している。
42. 再び人力車夫に就きて	労働世界・33号・ 1899年5月	横山源之助	『全集』1巻所収。人力車夫と漁民を同類とみ、両者に組合の必要を強調。
43. 北国の二名物	読売新聞・8086号 ~1900年1月(6)	天涯茫茫生	(北)慈善家小野太三郎と発明家鶴田和三郎の紹介。
44. 村落生活	新小説・5年4, 5号・1900年4, 5月	天涯茫茫生	(北)魚津近在の小川寺村での2ヵ月の生活と村民の生活の様子を伝えている。

論 文 名	掲載誌・号刊行年	筆 名	概 要
45. 宿場の社会観察	太陽・6巻12, 15号・1900年10, 12月	横山天涯 々生	(北) 魚津等の宿場町の変化を商業・交通等をつうじて観察。
46. 田舎だより	新小説・6年3号 ・1901年3月	天涯々生	(北) 44の続編で、村落生活の変化を最も確に整理している。
47. 慈善財団(秋田県の感恩講)	新小説・6年11号 ・1901年11月	天涯々生	感恩講の歴史と現状を述べたもので、貧民としての救恤の資格にも論及。
48. 富山の売薬	新小説・6年12号 ・1901年12月	天涯々生	(北) 売薬業の概略にふれつつ、行商人の具体的な活動も記録している。
49. 春風閑話(社会的暴動の数)	新小説・7年5号 ・1902年5月	横山天涯	明治初年の地方の一揆等の概略を紹介し、あわせて自由民権運動も寸評。
50. 漁民の生活	新小説・7年8号 ・1902年8月	天涯々生	(北) 魚津滞在中に記録した漁民の労働と生活を述べて、その貧民状態を指摘。
51. 慈善家の妻	女学世界・2巻13号・1902年10月	横山天涯	(石) 金沢市の小野太郎の慈善事業とその妻の協力を紹介している。
52. 村落と俗謡	文芸倶楽部・9巻9号・1903年7月	夢蝶子	(北) 北陸滞在中に集めた俗謡の分析をつうじての農村の観察記録。
53. 都市雑観	公民之友・1巻7号・1903年7月	天涯々生	人口統計上から地方都市の等級を区分し、政治・宗教都市等の分類にも言及。
54. 政治的都市の今昔	公民之友・1巻8号・1903年8月	天涯々生	前項53に続いて旧幕以来の諸都市の性格の異同について論じている。

論文名	掲載誌・号刊行年	筆名	概要
55. 祭礼	太陽・9巻10号・ 1903年9月	横山天涯	地方の祭礼の歴史性を述べつつ、その娯楽としての側面も指摘している。
56. 郷談鄙語	新小説・8年10号 ・1903年9月	横山天涯	旧幕時代に都会と農村の中間であった宿場町のその後の変化とまだそこに残っている旧町民生活の記録。
57. 大阪市と長崎市	公民之友・1巻9号・1903年9月	天涯茫茫生	旧幕以来の、とくに長崎の平民的都市としての歴史的な性格を論ずる。
58. 村落生活	公民之友・1巻10号・1903年10月	横山天涯	(北)44と同様に小川寺村での具体的な生活の記録。
59. 漁村雑記	公民之友・1巻11号・1903年11月	横山天涯	漁民生活を上野図書館蔵書で整理し、漁民の社会問題上の研究の必要性を主張。
60. 地方衰頹論	友愛・4号・1903年11月	横山源之助	宿場町の歴史を述べた後、近時の宿場商人の家計調査からその生活状態を比較。
61. 革命時代に於ける 過渡の工業(富山県 下の工業)	実業時論・3巻12号・1903年12月	有磯逸郎	(北)企業勃興期の富山県下の工業の概略を述べている。
62. 地方問題一二	友愛・5号・1903年12月	横山源之助	地方中流・下層社会の新しい有志者の登場を論及。
63. 工女の事情	女学世界・3巻16号・1903年12月	横山天涯	埼玉熊谷の織物女工の故郷や労働と日常生活の記録。
64. 日本大地主家庭生活	女学世界・4巻1号・1904年1月	横山天涯	地方の地主の家庭生活の生活記録。
65. 優勝の都会と劣敗の都会	公民之友・2巻1号・1904年1月	横山天涯	明治以後成長した都市、衰退した都市、その中間の3区分と各性格の比較論。

論 文 名	掲載誌・号刊行年	筆 名	概 要
66. 無名の大地主	公民之友・2巻2号・1904年2月	横山天涯	(北) 富山県下の地主西田温良の紹介。
67. 寂しき都会	新小説・9年5号・1904年5月	天涯茫茫生	水戸市の歴史と現状の紹介である。
68. 沖人足	新小説・9年8号・1904年8月	天涯落魄	口入屋の斡旋で入った沖人足社会の紹介。
69. 東京市の殖民地	中央公論・19年7号・1904年8月	横山天涯	東京市街の膨張を論じているが、地方都市の拡張と比較している部分も含む。
70. 中間社会(宿場の衰頹に就て)	中央公論・19年8号・1904年9月	横山天涯	宿場を都会と村落の中間社会と把らえ、東海道筋と足利地方の宿場町の現状を紹介。60とほぼ同文である。
71. 生活問題	中央公論・19年9号・1904年10月	横山天涯	前項の続編で宿場町の中産階級の生計状態を具体的に述べている。
72. 海と人	商業界・4巻2号・1905年8月	天涯茫茫生	九十九里浜の漁民の生活の記録で、地曳網の組織などに言及している。
73. 都市雑観	中央公論・20年9号・1905年9月	夢蝶庵主	65の続編で新旧の商工業都市等の諸都市の比較論。
74. 漁村縦談	中央公論・21年2号・1906年2月	夢蝶庵主	各地の漁業状態を述べつつ漁業労役者の生活状態を紹介している。
75. 蜃気楼と海女	文芸倶楽部・12巻12号・1906年9月	夢蝶子	(北) 魚津周辺の海女の労働と生活を論述している。
76. 地方商人の運命	商業界・6巻4号・1906年10月	有磯逸郎	(北) 北陸の地方都市の資産家の変転を分析しつつ、商人層の衰退の事情について論及。

論文名	掲載誌・号刊行年	筆名	概要
77. 地方商人救済策	商業界・6巻5号 ・1906年11月	有磯逸郎	前項76に続き、地方商人救済策として産業組合、資本の共同等を主張。
78. 琉球の新機軸と事業家	太平洋・6巻1号 ・1907年1月	樹下石上人	琉球の新事業として銀行、養豚、遠洋漁業、織物、移民等を紹介。
79. 足尾銅山の坑夫	文芸倶楽部・13巻4号・1907年3月	天涯茫茫生	足尾暴動後の坑夫の労働と労働状態の報告。
80. 東京博覧会の地方に及ぼす影響	太平洋・6巻9号 ・1907年4月	天涯茫茫生	日露戦後の景気にともなう東京への地方人口の流入と旅人宿、口入業者等の動向から地方社会をも類推。
81. 地方人が東京に出て商店経営に失敗する理由	太平洋・7巻10号 ・1908年10月		未見
82. 宿場生活	新小説・14年10号 ・1909年10月	横山天涯	各地の宿場町の変化の概論で、60・70と同趣旨。
83. 地下数千尺の暗黒裡	新公論・26年12号 ・1911年12月	天涯茫茫生	足尾銅山の坑夫生活の報告で前出79の続編。
84. 近時における地方実業家の失敗と其の原因	実業界・3巻9号 ・1911年12月	有磯逸郎	地方商工業者が都市に進出した後の失敗の実例の紹介とその分析。
85. 北陸地方の大小市街と其の消長	実業倶楽部・2巻1号・1912年1月	樹下石上人	(北)北陸の諸都市の動向を鉄道との関連で観察し、さらに各都市の産業にも言及している。

この目録は初出論文の年代順に作成し、81のみ筆者は未見である。刊行年の後に記載してある()内の数字は連載回数を示してある。概要中の『全集』とあるのは『横山源之助全集』(本文注参照)で『日本の下層社会』中の論文はそれを優先して表示した。(北)は北陸関係、(石)は石川県関係の論文であることを示している。

(22), (23), 55, 56, 60, 62である。⑥は地方社会における労働実態、労働事情に関するもので1, 4, 5, 9, (20), (28), (33), 35, (37), 42, 63, 68, 79, 80, 83である。⑦は⑥の中から地方の職人論をとりだしたもので、(18), 25, 27である。⑧は地方の工業、工場の報告で7, 8, 11, 12, (19), (28), (30), (31), (32), (48), (61), 78である。⑨は地方の人物論で、地主に関するテーマも含めて、(14), (15), (29), 34, (43), 49, (51), 62, 64, (66)である。⑩は地方の商人・事業家論で、6, 10, (25), (48), (76), 77, 78, 81, 84である。⑪は地方都市論で、53, 54, 57, 65, 67, 69, 73, (85)である。⑫は⑪の中から宿場町に関するものをとり出したが、(45), 56, 60, 70, 71, 82である。

横山源之助の執筆活動は1894(明治27)年の後半からで、1の「戦争と地方労役者」は最も早い時期の論文のひとつである。最終期は1914(大正3)年末であるので、その後半期には地方社会関係の論文を書いていないことになる。前述した様に1894年以降85本の論文目録を作成しうが、同時期の論文総数は約200篇を数えるので全体の4割を地方社会関係論文がしめているわけである。当初の筆名は天涯茫茫生が多く、とくにその主舞台の「毎日新聞」は大部分これを使用している。横山源之助の筆名は意外にすくない。毎日新聞社時代以降は雑誌寄稿が主体となり、『太陽』、『新小説』、『公民之友』と続き、後半には『商業界』、『太平洋』というような誌名が目立っている。この動向は他の論文も共通しているが、晩年は前述のようにテーマはもとより寄稿雑誌にも片寄りが生じている。

さて12のテーマを概観してみるといずれのテーマにも北陸地方関係の論文が含まれていることに気づく。石川県関係も含めて全部で35本で、毎日新聞社時代の論文21, 2度目の帰郷時のもの9, それ以外5本という内訳けとなっている。これは論文中に北陸に関する具体的な例示がなされているものを数えたが、その他の論文でも北陸を題材としていると思われるものもいくつかある。これは結論ともかかわるが、横山の地方社会観、地方認識といったものの基礎は北陸地方に置かれていたと断じてさしつかえない。なかでも①～⑨のテーマにおいてはその傾向が一層明確である。

⑩～⑫のテーマは横山の後半生の仕事で、とくに地方都市論をはじめとして都市論を盛んにとり上げている。郷里での2度目の滞在以後の作品であり、

これらには北陸地域に関する事柄はわずかししか反映していない。

以下⑧～⑩のテーマについては次節で、①～⑦、および⑪、⑫については第4節で検討することにしよう。

第3節 横山の見た北陸地方の産業

ここでは前掲の⑧～⑩のテーマをとりあげるが、地方の産業・工業、事業家、地主、商人といった様々な対象と内容が含まれる。そこで⑧の中の横山源之助の北陸の産業観を主に分析し、他のテーマを含めて地方の産業観、商業・商人観といったものを若干ではあるが補足的に検討することにする。

⑧の地方の工業・工場報告に関しては12本の論文があるが、北陸滞在中あるいはその経験にもとづく論文と他は桐生足利機業関係の論文である。このほか『日本の下層社会』の中には大阪・神戸などの阪神工業の報告があるが、それらは地方に関する論文とは見ないので除外した。

論文数はたしかに北陸に関するものの方が多いが、分量的には桐生足利機業地の方が圧倒的に多い。とくに11の「機業地の側面」は『日本の下層社会』の第3編手工業の現状、の第1章桐生足利地方の織物工場に整理されて収録されているが、400字詰原稿用紙に換算して80枚以上の大作である。その内容を記すと、1891（明治24）年以降の織物業の発達の中で桐生足利機業の位置を考え、同地方の女工の実態、賃業者の実態、織物製造業者と買継商、同地方の織物の粗製濫造と輸出の衰退について述べている。最初の点は8の論文にくわしく、最後の点は7の論文にくわしいので、7、8、11はワンセットの論文と考えた方がよい。これらを通読して横山らしい結論は次の2点に示されている。桐生足利地方の機業の衰退から「粗製濫造の行わるること概ね斯くの如し。或は之を以て賃業者を責め下機屋を責め即ち事業の回復を謀らんとす、迂も亦た甚しきにあらずや。機業発達の獅子身中の虫たる粗製濫造を杜絶せんと欲せば、一に弱者たる賃業者下機屋を責むるのみならず、一層尤むべき買継商の悪弊を正さざるべからず」⁽¹⁷⁾。そしてまた次のようにも言う。「小生は幾多の点に於て足利を観て失望せるにも拘らず、其の勤勉なる一事は称賛の辞を禁じ得ず候。日本の機業地として足利の名を海外に示すに至れ

るもの……一般足利の資本家が事業に敏捷なるが故なりと言うよりは、寧ろ足利地方の一般に勤勉の風習あるもの凝って足利の名を日本工業地の第一位に置かしめたるものにこそあれ。しかもこの般勤勉の一大現象は、男子の上に認むるよりは之を婦女の上に認められ候ぞかし」⁽¹⁸⁾。

「毎日新聞」掲載の論文の方にはないが、11を『日本の下層社会』の中に再録するに際して、32・33の論文が追加されている。この構成から考えて桐生足利地方を訪れた横山にとって、福井の機業はその比較対象として映じたにちがない。しかし分量や内容から推測して、北陸の機業界には横山の観察意欲をそそる材料はとほしかったようである。故郷での療養の後であり、また大阪での仕事の途中ということもあり、石川・福井に長期間滞在して視察する余裕がなかったことも一因であろう。北陸の産業については、19・61の富山県の工業、48の売薬、28・30の加賀の工業、31の九谷焼、32の福井の機業などの論文がある。

富山県の工業を横山源之助は「農業国の工業」⁽¹⁹⁾、あるいは「農業地方に於ける新村落の勃興」⁽⁶¹⁾ととらえ、そこにおこっている事態を「一地方の事実とせず、日本全国に渉れる工業革命時代の過渡の現象、として大に注意を置く」⁽⁶¹⁾と、必要のあることを力説している点で重要である。そこにおける共通の現象とは、ひとつは企業勃興に乗じた「粗製濫造者殊に贗品製造者」⁽¹⁹⁾の現出であるとする。もうひとつは、工業上の変動が与える社会的影響である。とるに足らぬ工業産額しかなかった富山県が企業勃興によって織物業をはじめとした工業を伸展させて、「僅かに半分しか鉄道の通ぜざる草深き中越の事としては、大業」⁽⁶¹⁾という事態となった。しかし、横山は「経済学者は、単に数字の増進を以て、一国の運命をとし居候様に候へ共、我れ等社会研究者は、一に数字にのみ満足すべからず、経済上の現象を見ると共に、社会の關係を見るを肝要と存候」⁽¹⁹⁾とも言う。そして下新川郡の1機業地を例として、一時、工場の勃興によって「一種の偉観」⁽⁶¹⁾を呈し、「村落ハイカラなる機業家」⁽⁶¹⁾を生み出したが、輸出羽二重の不振が到来すると、一瞬にして没落してしまったとするのである。この事実を横山は全国共通の事項と指摘したのである。

横山源之助は石川県について28、30、31のほか29、51と5つの論文を書い

ている。このうち28の「金沢瞥見記」は西田前掲論文の目録から脱落しており、興味深い内容であるので、次にその全文を掲げる。なお他の3論文は前掲『全集』第1巻にあり、また51は29とワンセットである。

金沢瞥見記

加賀金沢にて 天涯茫茫生

北陸の大都会、たとひ維新前に比して戸数を減じ繁盛を減じたるものあるにもせよ地方都会としては人家の稠密せる道路の整然たる公園の明媚なると共に充分他に誇るに足るべし。併しながら仮に金沢より當所を奪ひ県庁を奪ひ高等学校を奪ひ税務署を奪ふて裸躰とし見、更に生産の方面より金沢を見れば果して如何なるべきか、近年機業場生糸場等の諸工場勃興せしにもせよ加賀の工業と言へば能美郡江沼郡に存して金沢に於ては別に称すべき工業なく、商業は十間町の米穀取引所前少しく雑聞せるを見る外同じく挙げて言ふべきものなく金沢にては繁華の第一なりといふ尾張町の如きも日暮れて九時頃に及べば商店の半ば店を閉ちて路上極めて静かなり、畜に此上より言へば百万石の金沢も十万石の富山に比して劣るとも優ることなかるべし。

但し、此處に一事の挙ぐべきは実業的生産の欠たる代りに或る他の生産物に富めること驚くべし、曰く巡査、曰く芸娼妓、曰く小学教員、即ち是を金沢の三物産なりと知人は余に教へり、而してその輸出するや福井地方なる羽二重の輸出よりも他国に出づるもの量多しと称せらる、之を余が親しく知れる所の中越に就いて見るも女郎と巡査と学校の教師とは殆ど十分の七八までは金沢人なり、最も此の頃師範校出身者の増殖せるを以て日に日に劣敗して市町の小学教員に就いては特に眼を惹くもの大に減じたりと雖ども村落の小学教員は矢張金沢人多数を占め巡査も同じく金沢人なるが多く女郎も各遊廓の七八分までは金沢女郎を以て占め居れり是れ百万石のお蔭か。

而て労働者の困めるも他地方より甚しきが如し、序なれば金沢労働者の状態を述んに大工の賃銭四十銭、石工は同く四十銭にして別に道具代とし

て六銭を取り、左官は三十八銭他は概ね大同小異、各職人間に一昨年頃より組合の規約成り大工の如きは区域を七区に分ち（七区に分つは各組合概ね然り）組長副部長監督と役員を置き而て積立金の組織あり、毎月一日分の賃金を組合に納め貯金するの規約なりしが中途にして改て三銭と定め、外に五厘宛出して後日死亡若は天災の場合に組合員を救助するの費に供ふ、今日各組合に四五十円内外集り居りと聞く年期奉公は明治十年頃は十年なりしが今日は概ね五年に減せりとなり。

人力車夫は千二百人あり、帳場四十許り、概ね帳場に属すと雖も中には無所属の輩なきにあらず蓋し朦朧の類が、帳場に入るにはアシアラヒとして十人以上同業者居る場合は酒二夕樽（一ト樽二升）僅に三四人に過ぎざる時は一ト樽、客種は多く旅人にして市中の仕事極めて少なし、細民の多くは何処も同じ稼人即ち日傭取人足なり、その数万の上に出つ賃銭廿五銭乃至廿七銭當時鉄道工事あるがゆえにナマケ者に有ざる限りは手を休め居る者なし。車力は運搬量によりて均しからざれども概ね四十銭より五六十銭を得つつあり。若し其れ金沢に於て屑拾に類似の者を挙げれば下中島といへる町に住める細民か、渠等は背に蓆にて作れる袋様の物を荷ひ、手には螺にて作れる柄杓の如きを携へ頭に飯頭笠を戴き（渠等は如何なる場合と雖も之を頭天より離さず）各川辺を伝ふて釘折などを拾ひあるく。

今ま各労働者就中人足日傭取に就いて其の族籍を聞くに平民は七分強にして士族は三分弱、但し免税者三百二十八名（市役所調査）に士族半以上を占め小野救養場にては士族は十人に七人強の割合なるを見れば今日士族が如何なる運命にありやを想像するに難からざるべし。

百万石喜ぶべし悪むべからずや、今や数年ならずして鉄道は敷設せられん、金沢人士能く之に対する覚悟ありや、記して百万石の識者に質す。

（筆者注・傍点、ルビ、差別用語は削除した）

内容的には⑥のテーマが中心であるが、金沢に実業的生産がないという指摘を重視し、また論述の関係上からここで紹介した。前半は他に同様に述べるものもあるが、旧藩時代に較べて明治維新後の金沢の停滞ぶりを指摘している。後半、労働者が他地方に比して困窮していること、人力車夫の数は相

当に多いがその反面仕事のすくないこと、被差別部落民の存在など横山らしい観察力で見ている。

30の「加賀の工業」も検討しておくことにしよう。「加賀の工業といえば、多く能美郡、江沼郡に在り。而して能美郡は小松地方にして江沼郡は大聖寺地方なり。其の物産の重なるものを挙げれば、絹織物第一にして次は陶磁器、蕨類の如きものは是れなり」という書き出しではじまり、その概略を述べている。それに次いで金沢が登場する。「尚お加賀の物産として挙ぐべきは輸出羽二重あり、ハンカチーフあり金銀箔あり、是れ多く金沢の物産なり。地方大都会として是等の物産を有す、別に称するに足らずと雖も、近来切りに百万石風を脱して事業に意を注ぐに至れるは喜ぶべし。今や羽二重の如きは福井に次いで盛大なるに及べり」(30)。まだこの時点では輸出用羽二重の隆盛を迎えておらず、「称するに足らず」との評価も正当であった。

また羽二重の生産については全国的にみても福井・石川が大半をしめているが、「福井地方が景気よき時は、石川地方景気悪しく、石川地方の良き時は福井地方悪しと。何に依りて然るや明瞭に答弁を得ざりしと雖も、福井と石川とは其の製出品自から異なり居り」としている。そのちがいは福井産にくらべて石川産の製品は軽いことにあるとし、「総じて福井に比して金沢地方の工女の性質が緻密なるに由るものならん歟」と記している。ただしこの文節の末尾には「以上は組合の談話に拠る」(30)とことわり書きを付しているが。

福井の絹織物業については前述したように桐生足利地方との比較で観察されている。32の内容を列挙すると、機業は会社組織のものではなく、各機業家が集まって同盟社、精絹社といった組合組織を作っていること、桐生足利に見られるような賃業者、元機屋に対する下機屋といったものはなく機業家と工男工女という関係だけであること、工女の争奪があったことから福井絹織物組合が規約を定めて雇主と職工間の誓約を取り決めていること、工女の8割は自宅通勤であること、各工場は土蔵を改良した不十分な施設であること等である。あまり積極的な発言はみられない。

それより冒頭の部分で「越中を過ぎ加賀を過ぎて福井に来れば初めて工業地に入るの心地す」(32)と述べて、福井を北陸随一の工業都市とみている点に

注目しておきたい。続いて「裏町に入れば機具を繰るの響音彼方此方に聞こえ、表通にては『羽二重買込所』の看板張れる商店屈指に暇あらず。加えるに汽車の往来、汽笛の声を市中に送りて、腕車の往復激しく、之を富山金沢の如き路上に立ちて、往来の人力車を傭い得る寂莫たるものに比せば、草深かき片田舎より俄かに都会に出でし心地せらるるなり」(32)としている。富山と金沢を片田舎とし、一方福井を都会とみているわけであるが、金沢については前出の28の論文と共通した論調である。その理由のひとつとしては工業化の実情の違い、進展度もあるが、北陸線の影響もある。北陸線の開通状況は米原一敦賀間が1896(明治29)年7月15日、福井までが翌97年9月20日、金沢までが翌々98年11月1日となっている⁽¹⁹⁾。横山が福井を訪れたのは1897(明治30)年7月のことであるから、厳密には北陸線の開通直前だったと思われるが、もうその準備がほとんど出来あがっていた時期である。したがって鉄道の面から、福井と富山・金沢の景観に大きな違いがあったと想像されるわけである。横山は他の個所でも指摘するが、鉄道によって都市の機能・景観が変貌することをくりかえし重視している。

最後に補足的に⑨、⑩のテーマの論文について言及する。⑨では北陸に関するものが多いが、内容としては地方名士を題材とした14, 15, 48, 62, 地主を題材とした34, 64, 66, 慈善家を題材とした29, 43, 51といった論文に別かれる。⑩のテーマでは地方商人をとりあつかったもの6, 10, 25, 48, 76, 77, 81, 事業家・実業家をとりあつかったもの78, 84に区別できる。後半に属する論文はいずれも横山の本来の仕事とはことなつたところの、読み物的な内容にすぎない。そのなかで10, 25の2論文を読みごたえのあると評価して取り出しておきたい。

10の「地方の木賃宿」で興味深いのは東京と地方の木賃宿の比較論を展開している個所である。横山は7点あげているが、東京は重ねて宿泊する者が多いが、地方は一泊者が多い、東京は半分は外食者だが地方は外食者はいない、したがって地方はどんな木賃宿でも飲食具を用意している。東京の宿泊者は人足等肉体労働者が多いが地方は旅芸人、巡礼、坊主等不生産者が多い。したがって宿泊者の挨拶・作法がことなる。宿泊代を屋根代と呼ぶのは共通しているが東京は入宿と同時に支払うが地方は請求せず夜までに支払へばよ

いこと、屋根代は東京・地方ともそれぞれ場所によって相違がある、といった点である。木賃宿を下層社会民衆の宿泊施設と見てその比較論を試みているわけで、間接的な下層民衆論ともなっている。またこの論文は前橋での経験をもとに執筆されており、横山の地方認識としては貴重な事例でもある。

25は「国民新聞」に2度にわたって掲載されたもので、評価したいのは2回目の同紙(2162号)の分である。ひとつは地方の小資本家を例にとって都会の資本家と比較しつつ論じている。横山によると地方の商業者の特徴は「たとへば貧富等差を別つ場合に於ても事業に注げる財産よりも土蔵の器具物品を積りて其の標準を取る」ということになる。また、その職人論としては短文ではあるが、地方の場合「職人の賃銭にて一家を糊口しゆくに頗る困難」(25)で、日夜仕事のある職をみつけるか、女房の手伝いという職でなければならぬことを紹介している。

第4節 地方下層社会論の意義

ここでは横山源之助の北陸地方での認識をもとにした彼の地方社会論ともいべき点について検討し、本章のまとめにかえることにしよう。まず対象となる①～⑦、⑪、⑫の各テーマの大意を見たとうえでいくつかの論点を設定することにする。

①～⑤のテーマはひとつのまとまりをなしている。後述するように横山は地方の下層社会論を軸に農民・小作人、漁民、一般町民を比較しつつ観察し、それをつうじてひとつの地方論といったものを形成している。これらのテーマの主要な論文はいずれも北陸地方を題材として描かれ、論じられているのが特徴で、したがって横山の前半期の活動の結果でもある。⑥、⑦もワンセットであると把えるが、横山は労働事情に対する関心を生涯もち続けていたといえよう。⑪、⑫は横山の地方都市研究とも称すべきテーマである。このほかにも大都市だけの研究も別にある。その中でとくに衰退していく宿場町に強い関心を抱き、6つの論文を残していることに注目したい。

以下、対象となるテーマの論文は60本をこえ、その全部を検討することはできない。本章の課題との関係で次の5つの論点を定め、それぞれ考察する

ことにしよう。

第1の論点として、横山源之助の下層社会論の中に地方の下層社会論が当初より独立してあったことを挙げねばならない。横山は目録に示したように、「毎日新聞」の7764号から7796号にかけて、18回にわたる「地方の下層社会」を寄稿している。このうち7～17回は『日本の下層社会』の第5編小作人生活事情に転載されているが、それは富山県の小作慣行、小作人の実情を主題としたものである。重視したいのはこれではなく、1～6回分の16と18回目の18の論文である。この両者の内容は大別すると大都会（この場合は東京）の細民と地方の細民の比較、水災による地方細民の被害、地方の日傭・土工の実態、地方の徒弟制の4点になる。以下横山の述べる所を紹介しつつコメントを加えてみよう。

まず横山は地方（この場合富山県下）における細民と窮民、貧民の区別について簡単にふれたあと、「若し、人数の多を以て社会組織の一勢力となりせば、天下は或意味に於ては細民に由りて成れるものと謂うを得ん」⁽²⁰⁾としている。この場合細民を統計的な観点から納税不能者および免税者にあて、富山市の例では13,891戸の内約70%、魚津では3,215戸の内約67%が細民であるとしている。この免税者は「地方に於て窮民と称」されるとも述べる。

ところでこの一連の論文の中で、もっとも重要な部分は「都会の細民と地方の細民」⁽²¹⁾である。冒頭で「地方は都会に比して、固より極窮の細民歎しと雖も、事情を酌んで渠等の實際を思えば、其の憐むべきは地方は都会に等しく、寧ろ或は勝るものあらん」と述べた後、都会と地方の相異点をあげている。そのひとつは東京の最貧窟を比べると「其の窮、其の惨、地方の及ぶ所にあらずと雖も、而かも其の住民なる日傭取や人足や人力車夫や土方や屑拾は、妻帯せざる者殆ど半を過ぐ。地方に於ては独身なるは稀にして概ね妻あり子あり、近隣あり、親戚あり」。第2は「都会の生活は家を隣にして尚お言葉を交えざるものある如く、渠等細民も其の社交の上に於て、義理人情を尽すべき範囲極めて狭小なりと雖も、地方の生活は、好し貧民と雖も然かく単純なる能はず、近隣には近隣の人情あり、親戚の義理は堅く之を守らざるべからず。都会の細民に比せば人情の天地遙かに大なり、為めに心情に受くる所の生活の苦悶果して幾何ぞや」。第3は細民の夫婦の関係について「東京

も地方も妻の内職に従うは同様なれども、地方は家計の爲めに内職に苦しみ、東京は自己一個の爲めに内職に従ふが如し」。第4は宗教心の相違で、東京より地方の方が「信念頗る掬すべきものあり」とする。第5は「地方細民の爲めに傷むものは、地方は細民の需むる物品の供給都会の如く便宜を得ざる事是なり。東京は地方に比して生活の度遙かに高く、物価随つて騰れりと雖も亦た細民に適應せる幾多の好都合あり。衣服、飲食物、其の他種々の物品を需むるにも細民に便多し」。一方「地方は甚だ此便宜を欠く。地方の細民が東京を以て凌ぎ易しと称するもの、亦た宜なるかな」と生活上の問題を指摘している。第6は「都会に於ては人力車夫の如きも通例窮民に加えると雖も、中越にて窮民の中に加えず、細民なり。地方にて窮民と称せらるるは、日傭稼、芸人、漁夫、低級の小作人を名く。就中、富山高岡伏木を通して窮民の多数は日傭稼とす」としている。

こうした6点にわたる横山の指摘は何を物語っているのであろうか。都会の細民は独身者が多いこととも関連して居住している地域社会からは一応独立し、都市の雑業をになつている層と見ることができる。どうしてもその地域で生活しなければ生きていけないといったいわば追い込まれた階層では必ずしもない。その地域で条件が合わなければ他へ移動する可能性を持っていた部分でもある。その意味で都会の細民は都会という有利な条件を利用しており、さらにはプロレタリア化する一定の展望も有していた。一方、地方の細民はそれと対照的に特定の居住地域に家族もろとも根をおろし、そこで一定の生活のサイクルをもっていた。したがって居住地域での交際といったものにも、ある程度関与することが求められた。地域の慣習に従い、また地域の有力な宗教にも従っていた。その地域社会になじんでいる限り最低の生活条件は獲得できたが、しかしプロレタリア化する見込みはそこではまったくなかった。その地域社会から排除された際には、彼らはおそらく都市の下層社会に出ざるをえなかったであろう。その際、いきなり彼らが都市へ出ていっても何とかぎりぎりの生活をおこなえる一定の条件を、都市はもっていたのである。以上の都市・地方細民の比較論は他にはない貴重な視点である。

地方の下層社会について注目しておくべきことを他の論文でもうひとつ横山はふれている。それは23、24、39の論文の中でくりかえし指摘しているが、

地方における貧民救済策、機関がきわめておけている点である。「貧乏人は世の中の蛆虫ですわい」(23)という町民の声があり、町村役場において「貧民の事を質すを見て意外の面地をなし、じろじろ余を凝視するもあり」(24)といった事実の状況を横山は嘆いている。こうした地方の感覚は都市より一層困難な条件を地方の下層社会にもたらしけていた、といつてよい。また米価対策の欠除が地方において貧民による度々の騒擾の主因となっているとも横山は分析する(39)。

このように横山源之助の地方の下層社会論を見てくると、前述した隅谷三喜男の横山に関する把握は単純すぎ、『日本の下層社会』の内容に即しすぎたものであることがわかる。とくに都市と農村という風に対象をふたつに区分しているだけではないことを強調しておきたい。しかし毎日新聞社時代に都市と地方との関係、あるいは東京・大阪といった大都市と地方都市との関係とか差の問題を横山がどれだけきちっと整理していたかは別に検討する必要がある。その際の参考となると思われる論文をひとつだけ紹介しておく。それは目録には含めなかったが、「神戸の貧民部落」(「毎日新聞」1897年10～11月、8070、73、74、76号、天涯茫茫生)である。そこで「大阪の細民は職工多く、東京は日傭取人足多数を占め、神戸にては仲仕人足は細民の代表」(22)と述べ、都市の下層社会民衆の比較をしている。この点と地方分析とを並べて横山は何故精密な比較論を展開しなかったのか、その比較に際して各々の基礎条件となっている都市比較論をなぜ論じなかったのかは不明である。横山の活動の後半期になってはじめて都市論が登場するが、この点については第3の論点として後述する。

さて横山の地方の下層社会論の一角に小作人と漁民が位置していることは明白である。前者は③に属するもので前述のとおりである。後者は④に該当する。漁民を「細民中の細民」とみなし、「孰れの社会が最も細民多きかといへば、自分は直に漁民なり答ふるに躊躇せぬ」(50)と断言している。以下その生活の探訪記として50、59、72、74、75はほぼ同類の内容をそれぞれ指摘している。そこで横山がえがいている漁民生活を若干だけ紹介すると、漁民は米を日々買う「突ッ込世帯」であること、飲酒と女尊男卑の風習(59)、小作農は質屋に行きながら漁民は質屋通いをする、宗教心が深い(50)などといった

具合である。魚津で生活した経験がこうした観察の材料になっており、漁民を下層社会の1階層としたのは横山の独創であった。

横山源之助が地方社会の中で下層社会を第1の内容で独立した社会と考えていたとするならば、それ以外の一般町民、小作農以外の農民を中流社会の階層と把握していたことになる。この点を傍証するものとして次の1文を付け加える。「記録を追ふて十年前に溯り今日と引ッ比べて見候へば、下層社会はしばらく之を除き、一般に生活の高まれるもの最も眼に聳えて相見え申候」(13)。これは1896年8月6日に書いた「田舎の風尚」の冒頭部分で、十年前とはちょうど横山が故郷を出奔した時のことであろう。この1節に続いて町民の生活を述べているのである。②と⑤のテーマを独立させた理由はここにあるわけで、この点の検討を第2の問題として行ってみる。

都会と地方を比較しつつ下層社会を論じていることは前述のとおりだが、北陸滞在中の横山は一般町民・農民・漁民の比較という手法も度々駆使している。13, 22, 23の論文にそれをうかがうことができる。「田舎の正月」を例にとると、そこで横山は3者の正月の過ごし方、行事などを観察しているが、たんなる紹介にとどまっははいない。すなわち農民の正月は「自然にしたのしき」もので、ふだんの生活は年々窮するとしつつも、少くとも正月三ヶ日は「気楽に遊ぶ」様子を述べている。「米の飯を食うことをせざる小作人の家庭も、三ヶ日は蓆を新たにし、子供も妻女も糊張りの晴れ衣」に着更えるほどであった。次に町民（その例として官吏、学校教員をとりあげる）の「正月は芽出たき事は半分もあらじ」と横山らには見えたようだ。その理由は東京のように芝居を見物するわけでもなく、「花牌の流行、言語に絶する」ものがあり、「終局は必ず遊廓と繋がる」と嘆いている。職人の場合はかつては正月11日に「同業者相集まり、交際を厚うするとともに同業者の規約を定め、賃金を定めた」りして、「職人の大事の日」であったが、今では集まっても「乱酒するのみ」で、「手商売」を持たぬ者と軽んずる人力車夫の社会は、むしろ同業者の関係に於ては職人より多幸なり。あわれなる職人よ、今後益々競争激しかるべき汝の前途を如何せんとする」⁽²³⁾と危惧している。

横山は町民、農民、職人の正月を比較しながら、とくに町民、職人の正月の過ごし方に伝統的なもの（たとえば行事）が失われつつあることを鋭く指

摘している。その背後に資本主義的な生活感覚の変化、生存競争の激化といった事情があることを必ずしも明確にはしていないが、地方にも次第にその波及が及びつつあることを示唆しているといえよう。そうしたなかで、職人に対して述べている言葉の中には横山の深い同情がこめられている。

町民だけの生活については21がとりあげているが、農民の生活事情に関しては26の芝居見物、36の嫁入り仕度、41、55の祭礼、52の俗謡をつうじてと様々な題材をとって観察している。このように農村生活により多く関心を示したことは、2度目の帰郷後小川村での生活の伏線となったと考えられる。

過労でふたたび帰郷した横山源之助は「魚津の町を10数キロ離れた山懐にある」⁽²⁴⁾小川寺の心蓮坊（真言宗千光寺の一坊）に滞在した。この間の事情は立花前掲書に詳しいが、横山は「風流でもなく、洒落でもなく、都会の生活に倦」⁽⁵⁸⁾んでいたため、山寺で身体を休めたようである。そして1年半の滞在期間中の観察記録は44の「村落生活」⁽⁵⁸⁾も同名の論文であるが2番煎じの感じがする）と46の「田舎だより」である。44の前半は心蓮坊という山寺の様子を伝え、後半山村の生活を記している。46は村役場、八十の小使、新しき村落の3小節からなっている。都会の生活に疲れ、農村での生活に期待して訪れたが、結局横山の得たものは「村民の性情は、曩日の醇朴なる気風失せて、すべて軽薄となりし事なり、或意味にては、渡世に利巧とはなりし也、要するに『山』の生活は『村』に進み、『村』は『町』と風尚を等うしつつある」⁽⁴⁶⁾という結論であった。そうした折、前述したように高野等のさそいもあって村を去ることにし、同時に町＝都市の新たな研究を決意したと思われる。

ちょうどその転機となった論文が45の「宿場の社会観察」で、以下⑪と⑫のテーマの地方都市研究の論文をあいっいで発表している。これを第3の論点として検討したい。

⑫に関しては6論文あるが、45はその研究の意義を次のように言う。旅行者は都会や旧跡などに注意をするが宿場の変遷に注目する者はいない。「社会の土台は宿場と村落とにあれば、今日我国の社会状態を知るためには「宿場の状態を、精密に研究する」ことが必要であると力説する。続いて宿場の変化、宿場の1日、宿場の商売の状態、交通機関としての人力車夫、宿場の

社交、旧家と新家の対立、宿場の行楽などを分析する。さらに宿場の今昔を具体的に論じた後、宿場町は「都会と村落との中間」、「半日的都会」(56)と定義する。そしてその中間社会たる宿場町が、鉄道の発達を契機として衰退する態様を60,70,71,81の論文に記録しているのである。ただ横山の宿場研究はこれ以上には進んでいない。60と70の2論文は同趣旨というよりほぼ同一文で、81は一部分が同文となっており行き詰りを思わせる。この宿場研究は横山に広い意味での都市研究に向わせる橋渡しの役割を果たすと評価しておくことにしよう。

①のテーマは横山が後半期にもっとも興味を抱いた対象で、いずれも1903(明治36)年以降にその論文は発表されている。内容は大きく2つに分かれる。ひとつは「都市の等級」とか、「都市の種類」(53)と横山が表現しているところの都市区分論である。前者は人口10万以上を1等都市、5万以上を2等都市、「3等都市と為ると頗る多い」としながら人口2万以上の56市の都市名を列挙している(『日本帝国統計年鑑』第19巻にもとずいて)。後者に関しては都市研究者の所説によるとして「政治上の都市」、「宗教上の都市」、「商工業の都市」、「遊楽上の都市」(以上、53)をとりあげ、2,3の都市を例示しつつ解説を加えている。その各論を構成しているのが54,65,73である。これらのなかで横山独自の見解が示されているのは都市比較論を試みている73の「都市雑観」である。日清戦後以降、東京・大阪などの大都市に人口集中が進むかわら、政治的都市(地方中核的都市で金沢、鹿児島、仙台などを例示)が進歩していないこと、旧商工都市に対して「新しき産業的都会」の発展等を横山は見抜いている。

もうひとつは57,67,85の論文で、特定の都市の観察報告である。57は長崎、67は水戸、85は金沢をばじめとした北陸地方の諸都市が鉄道開通によってどのような影響をこうむったかを論じている。

宿場町研究からはじまった横山の地方都市への関心は地方都市が様々な要因で変遷し、様々な態様で存在している状況を把握するところまでたどりついた。様々な都市の存在の認識は各都市内に様々な階層が存在するという認識を、横山にもたらしたと思われる。この時期に横山は下層社会民衆以外の諸階層の分析にも論文のテーマを求めていることを前述したが、そうしたこ

との背景はこのように説明できるのではなからうか。もう少し客観的に見るならば、前半期の横山は下層社会研究という単眼で社会の観察を行っていたが、後半期は多くの複眼的視点で社会の観察を試みようとしていたと理解される。しかしその複眼は必ずしも統一的視点とはなっておらず、ともすると多様な中で混乱をも生じさせていた。また都市区分論をすすめる中でそれとの関連で下層社会論を見直すまでにはいたらなかったのは惜しまれる。ただしこの点は『日本の下層社会』以降の横山の下層社会論の展開の問題として、別に考察を深める必要がある。

第4の論点として⑥、⑦のテーマについて若干の考察をする。横山にとって地方の下層社会探究と並ぶ重要なテーマはその労働事情・労働実態で、なかでも職人のそれに強い興味をもっていたと思われる。

1の「戦争と地方労役者」は横山の下層社会研究の口火を切った論文で、「毎日新聞」に約1ヶ月間6回にわたって連載され、400字詰原稿用紙40枚をこえる分量である。この中で労役者の実態を見る場合「一定の労働、一定の賃金に範囲せらるるものを甲社会に属せしめ、乙社会へは漁夫、車夫、人足、土方の如き不定不常の労働賃銀に服従せねばならぬ者」⁽²⁵⁾という2区分を明確にしている。そして「平時に於て甲の部類の、其の乙の社会に比して生活の上にな否難易の別あるは、何処の地方にも通じて見らるべき現象なるべしと雖も、能く其の皮相を擺脫して自個甲社会の裡に入り見候わば、なんの甲社会と乙社会との間に逕庭なきが如く覚え申候」⁽²⁶⁾と述べている。この観点を日露戦争期まで横山は持ち続けた。しかし戦争（この場合日清戦争）時は別で「戦争の我労役者に与えたる影響の順序は、乙社会—出職人—坐り職人」⁽²⁷⁾の順序であったとするのが、1の論文の主張点である（出職人とは大工・左官・木挽、坐り職人とは下駄屋、傘屋等で両者とも甲社会に分類）。この論文では都市と地方との比較論も少し顔を出すか、後のように論旨が明確ではない。全体的には横山の処女作らしい力感が感じられる好論文である。

さて以下の関連論文を通覧してみると、横山は人力車夫と女子労働力にも探究心を持っていたことがわかる。人力車夫は東京の細民の典型と見ていたからであるが、4、9、28では地方の人力車夫が同じような状況に必ずしもないことにとまどいを見せている。最も傾聴すべき意見は20の「地方の下女私

底」であろう。その大略は次のとおりである。

都市・地方においてもっとも給金がよいと言われていた宿屋の下女をはじめ各下女が、近年不足をきたしている。その理由は各地の紡績所、製糸所、織物工場などの工女に年頃の少女が雇われることにあるようである。工女と下女の収入を較べると、下女は6カ月に2～3円であるのに対して、工女は月に3円をこえる。こうした事情から下女の不足がおこっているとし、「下女払底、余は或意味に於て工業の進歩を意味せるものとして、下女の位置を高むるものとして深く之を喜ぶ。雖然、工業の発達と共に年に農業労働者の減少し行くは、国家前途の爲めに寔に憂慮なき能わず」⁽²⁸⁾と結論づけている。横山は地方における女子労働力が都市の繊維産業に吸収されている点を適切に見抜いていたのである。さらにその状況をつうじて、工業と農業のアンバランスが生まれることも予想しているわけで、彼の観察力の鋭さを明示しているといえよう。

⑦では地方の親方徒弟制に焦点がすえられている。18では東京においてまだ旧い徒弟制度が多く残っているのに対し、地方ではそれがくずれはじめていることに注目している。例えば年期については10年前は5～8年間であったが、2～3年間に短縮されている。またその間親方の家に住み込んでいたのが通いとなっているし、そのため親方と徒弟との間の関係（情愛）が薄れてきている。さらに年期明け後のお礼働きも少くなり、師弟間の激突もおこるといった具合である。横山はこうした傾向が地方の各種の職人の中にいちはやくあらわれていることを指摘しているが、その理由、背景といった点にはまったくふれずに終っている。この論文が一連の地方の下層社会に関する分析の最後の部分をなしており、一応その結論めいた論点を述べていると想像される。普通、職人社会の親方徒弟制度の崩壊は工場における機械制生産化の進展にともなって、工場内部の手工的職人のもとでの親方徒弟制度の解体に次いであらわれる現象と考えられている。この点は横山自身が後に「東京の工場地及工場生活のパノラマ」(前出)で述べていることでもある。もちろんこの場合東京などの大都市の機械制工場などを念頭に置いているわけであるが、地方においてそうした関係では説明のつかない現象が10年も前から進行していたのである。

この論文を補足するものとして27の「地方職人の現状」がある。そこでも地方の職人の親方徒弟制度が急速に崩れつつあることを指摘しているが、その理由として、次の2点をあげているので注目したい。かつては職人間に同業組合的な太子講があり、賃金、弟子入りの年限、縄張りなどを厳しくとり決めていた。年々職人の生活が苦しくなる一方職人間の求職の競争が激しくなり、そのために同業組合の約束が守られなくなってきたことを第1の理由としている。さらにそうした中で各職人には特定の得意先が次第に少くなり、請負い仕事が多くなっていった。したがって得意先に特別な技術をふるうといった機会がなくなり、特殊な技術を親方から徒弟に伝達することがあまり重視されなくなった事情を示している。大都市の状況とはことなっており、地方では職人間の競争が大都市より早い時期に親方徒弟制度の崩壊をうながしつつあると横山は感じとったのである。こうした横山の地方の職人制度の変化についての分析は従来注目されていない点であるので、ここで取りあげて紹介したわけである。

横山源之助の地方社会論の中で、北陸地方に関する論文の位置づけについてふれることを最後の論点としよう。横山が地方社会の中で取りあげたテーマのうち、①～⑤、⑧・⑨の7つのテーマには北陸での経験が土台となってその論が形成されていたことは明白である。目録に表示した以外にも、具体例を出してはいないが、明らかに北陸の事情を念頭において書かれた論文がある。したがって地方社会に対する認識はわずかな例外はあるが、北陸地方の認識と言いかえた方が正確なほど強い関連性を有していた。横山は他の地方社会での生活を経験しなかったわけであるから、北陸の経験を一般化しているとするならば、その正当性について吟味する必要がある。しかし筆者はその必要性を主張しない。横山の観察報告はそれ自体当時を語るひとつの資料であるから、それを資料として利用するわれわれがその点を充分承知していればよいと考える。このことは重複をさけるが、横山の下層社会論は大都市の下層社会しか論じていない、あるいは東京も地方も神戸も同様の下層社会と見ていた等と単純に理解してはならないし、その資料批判が必要であることと同様の事柄である。

3度目に故郷を離れた後、横山は北陸に長く足をとどめる機会を持たなか

った⁽²⁹⁾。そのため時間の経過と共に知識は枯渇し、2番煎じの論文も登場することになる。生活のための文筆に追われ、地方社会に関する新しいテーマ、内容を次第に見つけられなくなってしまった。その間彼の関心はなぜか移民問題に傾いていく。本章の冒頭、横山には放浪癖のようなものがあつたと述べた。こうした性格は別な言い方をすれば、関心が種々に移りやすい性格であつたのだと思う。その意味では下層社会とその民衆についての研究心は生涯一貫しており、まさに横山にとってそれはライフワークであつた。

- 1) 西田長寿「横山源之助著『日本之下層社会』の成立—その書史的考證—」歴史学研究会『歴史学研究』第161号(1953年1月、岩波書店)所収。
- 2) 隅谷三喜男「第1巻『日本の下層社会』解説」『横山源之助全集』第1巻(明治文献、1972年12月)所収。なお、同『日本賃労働の史的研究』(御茶の水書房、1976年10月)に再録されている。
- 3) 前掲『横山源之助全集』第1巻、649頁。
- 4) 横山源之助『凡人非凡人』第24(前掲『横山源之助全集』第3巻、1974年9月所収)を参照。
- 5) 例えば、山田博光「二葉亭と松原岩五郎・横山源之助」(至文堂『国文学; 解釈と鑑賞』第28巻6号、1963年5月)を参照。
- 6) 小田切秀雄「下積みの人間への盡きない愛—『日本の下層社会』—」(岩波書店『世界』1949年10月号)64頁。
- 7) 叢文閣『経済評論』3-1、1936年所収。
- 8) 同前、24頁。
- 9) 橋本哲哉「民衆運動と初期社会主義」、歴史学研究会・日本史研究会『講座日本歴史』8、近代2(東京大学出版会、1985年6月)220~221頁。
- 10) 橋本哲哉「日本帝国主義確立過程の労働問題」、歴史学研究会『歴史学研究別冊(1971年度)』(青木書店、1971年10月)を参照。
- 11) 立花雄一『評伝横山源之助』(創樹社、1979年4月)8~11頁。
- 12) 黒田源太郎『炉辺夜話』(私製本、1933年10月)398頁。著者等については立花前掲書にくわしい。黒田は横山と同町内出身で3歳年下である。
- 13) 立花前掲書、104頁。
- 14) 同前、132頁。
- 15) 同前、166~167頁。
- 16) 以下論文の引用に際して掲げる数字はとくにことわらない限り目録中の頭書の書号であるので参照してほしい。なお引用資料を明示する際の()の数字も同様である。
- 17) 前掲『横山源之助全集』第1巻、122頁。
- 18) 同前、446頁。
- 19) 金沢鉄道管理局編『北陸線の記録』(1952年4月)14頁。

- 20) 前掲『横山源之助全集』第1巻, 465頁。
- 21) 以下, 同前, 466~469頁を参照。
- 22) 同前, 501頁。
- 23) 以上, 前掲『横山源之助全集』第1巻, 481~489頁。
- 24) 立花前掲書, 162頁。
- 25) 前掲『横山源之助全集』第1巻, 346頁。
- 26) 同前, 347頁。
- 27) 同前, 348頁。
- 28) 同前, 280~281頁。
- 29) 正確に言えば, もう1度北陸地方に調査の足を向けていると思われる。『職工事情』編纂のための工場等の資料調査に, 北陸地方の機業場をいくつか訪れているようであるが, この点については別に検討する機会をもつことにしよう。